

---

# MURDER OF

## 蛇豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MURDER OFF

### 【Zコード】

Z2526Q

### 【作者名】

蛇豆

### 【あらすじ】

降りしきる豪雨の中、高校2年の不良、加藤竜平の連れた3人の友が2mを越えるレインコートの大男に殴殺された。即死だつた。そして、3つの死体が公園の土の上に横たわる中、激昂した竜平とレインコートの殺人鬼との血みどろの喧嘩が始まつた。

敵の強大さを悟つた竜平は懐にあつたカッターナイフに手を掛ける…。

純粹すぎる暴力小説。

おい、修一。あんな気張つてたんじゃねーか。

手前もだ、田口。白田向いてないで立てよ。

やる気あんのか、松っちゃん。いつまでもへばってんじゃねーよ。

立てよ。

一緒にヤツちまおうぜ。

おい。

・・・・・

手前ら・・・死んでんのか・・・?

俺の連れ達は額から血を流し、横たわったままピクリとも動かない。  
豪雨の公園。叩きつけるような雨の中、

俺と対峙していた男　　23のレインコートの男が猛スピードで迫  
つてきた。

愛媛県松山市居相町椿公園。新学期が始まつて間もなくの9月初日  
の出来事だった。

俺、加藤竜平の3人のダチが殺された。

## 2 (前書き)

1話で

豪雨の海岸線のところを豪雨の公園に訂正しました。  
すみませんでした。

俺は今日、朝の9時に、通っている高校、南高へ登校した。

校門をくぐり、1-B教室の中に入ると、クラスの目が一斉に俺の方へ移った。好奇の目だった。

うぜえ。珍しく来たからって調子こくな。見せ物じやねえ。睨みつけると、群衆はそっぽを向いた。

そんな中、俺は机に足を放り出して座つていると、

「おい、竜ちゃん。」声がした。見ると、金沢修一が教卓の上に座つて赤の長髪をくるくるといじつっていた。「んなとこ座つとらざにこっち来いや。」

俺は仕方なくそつちへ行くと、田口俊、松崎直人の姿もあつた。

「夏休みどうだった?」「田口が傷だらけの唇を尖らせて聞いてきた。

「ああ、修一と一緒に他校潰し回った。中等教育学校も何故か來たけど、弱くて傑作。」4人は汚い笑い声を上げた。

「そういうや、お前の煙草つて何だっけ?」

「セブンスター。親父が趣味変えやがつた。」

そんな話を5分程。

すると突然、修一が俺に対して前傾姿勢になつて話しかけてきた。

「なあ、レインコート野郎の話つて知つてるか?」

放課後。4人で近くにある公園、椿公園へ寄つた。南高から徒歩10分だ。

何故寄つたか。

椿公園の中には入つて右側に寂れた便所がある。そこで煙草を吸うためだ。ここなら、頻繁に煙草の吸いがらが落ちているからその場に捨てても何ら問題ない。

今日の椿公園はいつも増して閑散としていた。公園のシンボル、恐竜のジャングルジムには、落書きだけの尻尾のところに新しい落書きがまた追加されていた。

下劣極まりない単語の羅列文だつた。

気づいて上を見上げると、厚い雲が空を覆つていた。

「ちやつちやと吸おうぜ。雨が降りそうだ。」竜平はそう言つてトイレに入ると、他の3人もトイレの方へ向かつた。

中は狭く、汚らしいものだつたが、2つの便器の個室があつた。4人は向かつて奥の方の個室に入り、煙草を吸い始めた。

そうしてちょうど雨が降り始めた。

豪雨だつた。

#### 4 (前書き)

私はEYESというバイオ系の小説と同時進行でやっています。  
是非ともEYESのまつも読んで下さい。

「いりや洪水になるな。」竜兵は呟いた。この言葉は決して冗談ではない。

五月蠅い雨音を立てる豪雨は留まることを知らない。むしろ勢いが増していく。

まるでラジオのノイズだ。

ザザザザザザザザザザザザ。

帰りはずぶ濡れだな…入っている洋式トイレの個室は暗だというのに暗かった。厚い雲が日光を遮っているのだ。

「雨宿りしねえ？これは酷え。」田口がまたも口元を尖らせた。

煙草の吸いがらが便器に張った水の上で浮かんでいる。

「そうだな。俺の自慢の赤髪がずぶ濡れになっちゃしうがねえ。」と修一。また長髪をいじりだす。

すると、滅多に口を開かないデブの松崎がクク…、と修一を見てほくそ笑んだ。「おめえはハイジか…？ぶふつ、」

「あ…？テメ殺すぞ。」途端に修一が松崎の顔をのぞき込んだ。

「あー。止めてくれ。」俺は2人を制止するために互いの頭を掴んで距離を離した。こんなに狭い室内で殴り合つたら巻き込まれ必至だ。

その時だった。

「君達、そこで何をしてるんだ？早く出てきなさい。」突如、個室のドアがノックされた。

誰だ…まさか…警察か?  
まずい…。

トイレを流した。音が雨音で搔き消された。

「早く開けなさい。」扉の向こうの男がさらにノックし、催促する。

「どうするよ…? 即殴るか…?」修一が静かににたついた。一緒に俺と他校を潰し周り、腕も付いた。

皆頷いた。こっちは4人。相手は多分1人だ。数で勝るし、力量も自信がある。

「せーので開けるぞ…」俺が扉を開ける。修一、松岡、田口が飛び込む準備をする。

「警官だつたらどうする…?」

「知るか。」おびえる松岡に修一が一蹴する。  
向こうの男は未だノックし続けている…。  
いくぞ…。拳に力を入れる。

せー…のっ!!

俺は一気に扉を開けた。3人が一斉に飛びかかる。

が、そこには誰もいなかつた…。

しかし次の瞬間、松岡の石頭がひっしゃげて吹っ飛んだ。

「…?」修一と田口がほぼ同時に振り向いた。

するとそこにはレインコートの男が立っていた。  
かなりの大男だ。2メートルはあるだろう。その顔はフードの陰  
で見えず、拳が雨と松岡の返り血で濡れている。体を包む青のレイ  
ンコートが雨の独特的匂いを放つ。

松岡を見ると、白目を向いて、仰向けに倒れている。トイレの汚  
れたタイルに頭蓋から血と脳髄を注いでいる。それがゆっくりとタ  
イルとタイルの接合部を伝っていく。

「高校生の分際で煙草なんて吸つてるからこいつなる。」突然、レ  
インコートの男が口を開いた。よく響く重低音だった。

「…」  
こいつが、今日学校で修一が話したレインコート…。雨の日に突  
然現れる、悪魔のような力を持った男…！

松岡は死んだ。レインコートによる一撃によつて頭蓋が破壊され  
た。即死だった。

この時トイレの個室から出た竜平はこの構図を田の当たりにして  
驚愕した。

「テメ…！」ぶつ殺すぞ…！」修一と田口はガンを飛ばして  
構えた。

しかし、対するレインコートの男はその憎悪の目に全く物おじし  
た様子を見せず、掛かつてことと言わんばかりに挑発してきた。

すると、「うおおあああああ！」田口と修一が男に飛びかかっていった。

修一の得意戦法はタックルで押し倒してからのマウント。必勝パターンだった。これをされればいくら相手がタフだろうと必ず気絶していた。竜平は夏休みの間にこの彼の戦法を嫌と言つほど見たのだった。

「死ねやあ！－！」次の瞬間、修一が男にタックルをました。男は勢い良く尻餅ををついた。

田口はそれに間髪入れずに蹴りを見舞った。ロー・キックが男の顔面に炸裂した。

それを見て、竜平も飛び込んだ。倒れた男の腹に強烈なスタンプを見舞つた。

すると、修一が男の上に乗つかった。マウントだ。次の瞬間、男の顔面に拳の暴風雨がぶち付けられ始めた。

グシャグシャグシャグシャ。エグい音が規則的なリズムで発せられる。

グチャヤ。不可思議な音が響いた。液体を叩くような音だった。次の瞬間、竜平の目に恐ろしい驚愕の光景が突き刺さった。

マウントしていた修一の顔が半分に抉れていた。信じられない程の大量の血液が噴水の様に男の顔に降り懸かっていた。頭部の天辺からこぼれ出た脳味噌が床でプリンのように揺れていった。

男がゆっくりと立ち上がった。同時に修一だった「モノ」が力無く横に倒れ込んだ。田口の蹴りで少々腫れが出ていたが、一瞬垣間見えた顔はほぼ無傷だった。どうやら先程の音は男が修一を殴打していたものだつたようだつたらしい。

その事が竜平と田口2人を身震いさせた。マウントされながら顔面を殴打して修一の命を一瞬で奪い去つた……。手打ちで顔面を抉り取る拳は一体、本来の力はどれ程の物なのか……？2人は息を呑んだ。

男がゆっくりと近づいて来た。構えも取らず堂々と歩いてきた。  
「煙草を、吸っているから、こうなる。」途切れ途切れのその言葉から狂氣を感じられた。

男が床に零れた修一の脳髄を踏みしめると、中から白濁色の訳の解らぬヨーグルトが勢い良く滑り出た。

「あひや、あひやひや、やひあひひやあひあややひ。」すると、狂つた田口が不気味に笑い始めた。そして、一頻り笑うと突然前のめりに屈み、胃液を吐き出した。

「おうえうえ、げるおええげぼ」ビチャビチャと吐寫物が床を叩いた。先程買ったコンビニのサンドイッチの肩も共に出てきた。次の瞬間、屈んだ田口の顔面に男の渾身の膝蹴りが入つた。

すると、  
ふきゅ。

と田口は情けない呻き声を上げながら顔面を醜く崩壊させた。まず鼻の骨が、烈火の中に枝を投げ入れた時の音と共に潰された。尋常ではない量の鼻血が滝のように迸った。反射的に涙を流すほど の鈍痛が田口を襲う。

しかし、男の膝の勢いはこれしきのことでは全く衰えなかつた。ぼぎや。雨音に搔き消されない程の大きな音が響いた。その音は確実に人の呻き声ではなかつた。

直後、その光景を目撃した竜平の心臓は一瞬にして凍り付いた。「べぎやああああああああ！」叫び狂う田口の頭部が変形していた。顔面は男の膝の形に沿つて凹み、後頭部がそれを盛り返して様に歪に膨らんでいた。

「いだ、いだいよおおーーだれがだづげでええーー」口から血のあぶくをこぼしながら、聞くに耐え難い悲鳴を上げる。唇が紫色に膨張していき、切つたところから赤黒い血がどくどくと流れ出た。

「おひや、おへひや、じに、だぐ、ないよお…」田口はゾンビの様な千鳥足で竜平の方へ歩み寄ってきた。おぼつかない足取りで、ゆっくりと。そして数歩進むと、突然膝を落とし、前のめりに倒れこんだ。大量の血糊を床にぶち撒けてから事切れた。

田口が死んだ。

松崎も死んだ。

夏休みと一緒に他校を潰し回った修一も死んだ。

皆死んだ。

残つたのは俺だけだ。

皆死んだ。

みんな、しゅんだ。

みいんな、しゅんだ。

あかいおはながたくさんさいたよお、あはははは

「うつー！うわああああああー！！！」竜平は突然叫んで死に物狂いで逃げ始めた。

何なんだ！？何なんだ？！何が起こっているんだ！？これは夢か！？

とにかく逃げろ！…もう一生走れなくなつてもいいから今だけは全力で逃げろ！…

トイレを出た。と同時に途轍もない雨が竜平の体に叩き付けられる。

死にたくない！死にたくない！

肺の焼かれるような痛みが増していく。

とにかくこの公園から出——！

次の瞬間。

俺の右腕が背後から掘まれた。もがくがその腕はびくともしない。そして、聞こえた。

「何逃げようとしてるのかな？」

直後、掘まれた腕がいきなり後方に引っ張られた。

「うおあつ！？」突然の出来事に対応できず、俺は為す術もなくバランスを崩された。

そしてそのまま遙か後方へ投げ飛ばされた。俺の体は空高く宙を舞い、出口と反対側のフェンスに叩き付けられた。

「かはあつ……あ……つ！」声にならない呻き声を発し、地に落ちた俺は喀血した。地面に滴る血液はますます勢いを増していく豪雨によつて留まらぬ事無く流されていく。

「タバコを吸うからいけないんだ。子供がタバコを吸うからそうなるんだ。」すると、屈み込む俺の前方から不気味な笑い声が聞こえた。

だめだ……俺……死ぬ……

土下座をしたら許してくれるのだろうか……？

いや……無駄だ。

あいつは狂っている。

何もかも……。

心も体も……。

何を言つても無駄だ。

畜生……！畜生！

第一何故煙草を吸つたくらいでダチを殺されたんだ……？！

煙草吸つたのは罪だ。だが、それで死刑はバカでけえ釣りが来る。

不条理すぎる……！

ぶつ殺してやる！

だが、俺には奴に勝てるほどの力はない。

どうする……？！

ベンチもごみ箱もあの調子じゃ効かないだろう……。  
まず当たらない。

……。

……痛え……

クソツ、太股を切つちまつた。

痛えよクソ、フェンスか……？！

いや……

待てよ……

違う。

忘れてた。

ポケットの中に、

カッターナイフが入つてたんだった。

ぶつ殺す

「もう終わりかな、不良君？」

「つるせエ、俺を見下すんじゃねえよ……！」

いつして竜平と男との戦いの火蓋が切つて落とされた。

「ほう。」男は言った。「度胸がある」とは認めようが

「ペラペラ喋んな、殺すぞ」竜平はポケットをまさぐり、カツタ  
ーナイフに手を掛けた。だが、まだ出さない。

男が脅しが通じない相手だと竜平は悟っていた。下手に出したら  
はたき落とされるだろう。

抜く時は男の懷に飛び込むか本当に絶体絶命になつた時だけだ。  
竜平はその時が来るまで、触れたら即死に直結する、男の豪腕を  
すべて避け続ける気なのだ。

竜平は構えた。一番自分に慣れ親しんだ構えにだ。

身を半身にして体のヒットポイントを減らし、左を前方に出し、  
いつでも改心の一撃を叩き込めるように右を握りしめた。

竜平の喧嘩スタイルは我流ボクシングだ。ジムで習つてはいない  
が彼の兄から教わつたものをアレンジしたものだった。

竜平が男と徐々に間を詰める。靴底から雨水が入り込み、靴下に染み込んだ。不快な感触だ。

男も距離をゆっくりと詰めてきた。レインコートのフードに豪雨が五月蠅い音を立てて叩き付けられる。

分厚い雲が完全に太陽を隠し、その光を遮ると、周囲がまるで夜のような暗闇と化した。

凄まじい豪雨により、公園で遊ぶ子供、脇の道路の通行人、竜平と男以外、人間は誰一人いない。公園の倉庫の屋根に留まっていた鳥も飛び去ってしまった。そしてこの豪雨は、2人の体温、聴覚、さらには視覚まで、奪い去ろうとしている。

これならいくら蹴つてもいくら殴つても他の誰も気づかない。いくら叫んでもいくら助けを求めても他の誰も気づかない。

「絶対殺す」竜平が呟いたが、その声はすぐに雨音に揉み消されてしまった。

そして、男が満身の力を込め、拳を大きく振りかぶった。

次の瞬間、竜兵に向かつてもの凄い速さで丸太の如き太い拳が振り降ろされた。

頭を横に滑らせてこれをいなした。鼓膜に空を切る音が掠めた。だが、拳のキレが半端ではなかつた。拳が掠めた竜平の頬の皮膚が皮一枚、切り裂かれた。血が滴る。しかし、すぐに雨水に流された。だが、ダメージは無いに等しい。

今度はこちらの番だ。

竜平は避けざま、男の腹に回し蹴りを見舞つた。蹴りの圧力は男の鍛えられた腹筋を貫き、内臓を押し潰す。

「かはっ…！」男は唾液とも胃液ともつかぬ液体を吐いて、嗚咽を漏らした。身を屈めて痛みに耐える。

その隙に竜兵はステップインし、右拳を大きく真上に振り被つた。チョッピングライト。右の打ち降ろしだ。

「もらつた！！」竜平は拳に全体重を乗せ、力を溜めた腕を思い切り鎌のよう振るつた。

だが、次の瞬間に頭が吹き飛んだのは竜平の方だった。

「あつー！」頭が跳ね上げられた。頭蓋の中で脳が揺れる。  
何を喰らったんだ俺は？！

答えは左アップバーだった。竜平のチョッピングライトに合わせられ、カウンターになってしまった。

歯を食いしばってこれを耐え、再び前を向いた。

しかし、そこで待っていたのは拳だった。

男の左ジャブが正確に竜平の顔面を捉えた。鼻血が吹き出した。再度左ジャブ。今度は両肘を置んでブロックした。つもりだったが、男の拳がガードの間を滑り込んできた。またしても直撃してしまった。

攻撃を立て続けに喰らった竜平はたまらず後退した。

しかし、すぐに網状の固いモノが背中に当たつてこれを止める。フェンスだーー

そう竜平が理解し前を向いた直後、目の前に信じられないものが飛び込んできた。

男の右拳。右ストレートだ。

アップバーで仰け反らせ、ジャブを打つてからの踏み込み右ストレートー。

何だこの技の連携は。  
間違いない。

こいつプロだーー。

戦慄が走った。

この右ストレートだけは貰っちゃいけない。  
俺の本能が叫びを上げる。  
迫り来る拳が特急列車のように見えた。  
これだけは避けないといけない。  
俺の第六感が雄叫びを上げる。  
突如、目の前で走馬燈が走った。  
これを喰らつたら死ぬ。  
俺の中枢神経が絶叫した！

竜平がとっさに身を屈めたその一瞬後、すぐ後のフェンスから  
凄まじい爆音が轟いた。

何が起きたかわからなかつた。

ただ、ここにいては危険だという本能に従つて距離を取る事にした。

横にステップし、そのままの勢いで後退する。

しかし、男は追撃する素振りを見せなかつた。

見ると、先程爆音のしたフェンスが男の出した拳の形そのままにひん曲がつていた。

人間じゃない。竜平は思わず後ずさりした。

しかし男の拳を見ると、大量の血がそこから滴り落ちていった。鉄のフェンスを思い切り殴つたら当然の事だ。折れた骨が皮膚を突き破り、男の右拳は剣山のような刺々とした物体に成り果っていた。

「俺の渾身の一撃を避けた人は君で初めてだ。」男が口を開いた。剣山になつた己の右拳を他人事のように眺めながら。

「そうかい。」竜平は素つ気なく答えた。先程のアッパーでまだ頭が割れ響くように痛む。

しかし、ニヤリと笑つた。

奴の右拳はもう使い物にならない。

右脇腹ががら空きだ。

あそこをカツターで抉り飛ばしてやる、と。

再び両者じわじわとじり寄る。

男はもう右拳は使えない。

竜平にとつてこれはチャンスだ。

ポケットに手を触れてカッターナイフの存在を確かめる。いつでも抜ける。

いつでも刺せる。

懐に入ることができたらの話だが。

男は左一本でも十分に強すぎる。

竜平の警戒は最初と何ら変わりはしない。  
油断が即、死に直結する…。

間合いが詰まってきた。

踏み込んで手を出せば当たる距離だ。

竜平はここで大きく深呼吸した。

酸素の枯渇した肺に空気を送り込む。

今度は俺が主導権を握る番だ。

息を吐いた直後、竜平はそう意氣込んで、男の懐に踏み込んだ。

だが、次の瞬間男がとつた行動は——  
後退だった。

意表を突いた行動に竜平は一瞬戸惑いの表情を隠せなかつた。

これまで攻め続けてきた奴が後退するだと??!

——右拳がシャカになつたからだろ? よ

自分でそう結論づけると、出来た間合いを詰めるため再び前へ踏み込んだ。

しかし次の瞬間、不意に竜平の顔面が男の出した左ジャブで弾かれた。

「つあっ……！」口の中で鉄の味が広がつた。

と思った直後、また左ジャブが直撃する。

竜平はたまらずたらを踏んだ。

それと同時に今度は男が踏み込み、間合いを詰めた。すると男は左拳を強く握りしめ、半身になつた。

竜平は勘づいた。

左フックが来る。

まずい。大きく仰け反った今の状態じゃ避けられない。

竜平は素早く右腕を小さく置んでそれを側頭部に持つていった。  
今出来る精一杯の防御だ。

だが、

これを凌いだら今度こそ俺の番だ。  
小さく舌なめずりをした。

フックは拳の返しが遅い。つまり、打った後の隙が大きいのだ。  
竜平はそれを狙っている。

もうすぐ奴の拳が来る。

耐える！！

竜平は全身の力をガードする右腕に集中させた。  
歯を食いしばる。

この一発を耐えるんだーー

だが、右腕からは大粒の雨が皮膚を叩いてくる以外何の感触も伝わってこない。

いくら経つてもフックが来ない。

何故だーー？

その答えはほんの一瞬後明らかとなつた。

目の前に何かが迫つているのに気づく。

何だ、あれは？

竜平は凝視したが、直後には距離が間近になり、その必要もなくなつた。

今、目の前に迫り来るも…濡れたビニールの丸太…の様に一瞬思つたが、それは单なる幻覚だった。

男の左膝だ。

男は左フックと見せかけて膝蹴りを繰り出していたのだ。フェイントだ。

当然、竜平は想定外だ。

田口の顔面を破壊した膝蹴りが成す術もなく竜平の顔面に直撃した。

その膝蹴りの衝撃は「痛い」を通り越してある地点さえも通過する。

「地獄」だ。

脳が断末魔の信号をクエーサーの如き高速の点滅を繰り返す。その信号が全身の全神経に送られる。途端、全身が丸ごと、烈火に貫かれた。

眼窩の裏側の完全なる闇の中、ふつりと意識が途絶えた。

みんな、しゅんだ。

みいんな、しゅんだ。

あかいおはながたくさんわいたよお、あはははは

誰だ手前エ？

みんな、しゅんだ。

そうか。

みいんな、しゅんだ。

ですか。

あかいおはながたくさんやったよ、あせははせ

やうか…松崎…田口…修一…死んじまつたんだよな…。

みんな、しゅんだ。

…。

みいんな、しゅんだ。

…。

あかいおはながたくさんやったよ、あせははせ

…幾つだ?

…。 よりつ。

松崎…田口…修一…と…俺、いや違う。

あいつだ。

「待てやああああああ手前ええええええええええええええ！－！－！－！」  
目が覚めた。絶叫しながら竜平は起きあがつた。

その場を去ろうとしていた男が振り返る。

「死ねええええええええええええ！！！」すると、先程まで死んでいたと思っていた奴が全速力でこちらへ突つ走つてきているではないか！しかもその手にはカツターナイフ。

男はとっさに身構えて左ジャブを連射。来事に全て手打ちになつてしまつていた。

男はとっさに身構えて左ジャブを連射するが、あまりの突然の出来事に全て手打ちになってしまっていた。

そのジャブは全弾竜平に直撃したが、怒りと憎しみの権化と化した竜兵にとつてもはやそれは小石同然だった。意にも介さずそのまま突っ込んでくる。

男は思つた。

今度こそ、足を地に着け、腰を回す。

左ノ久

そしてその収束された力を一気に解放する

男の拳が竜平の右頬に深くめり込んだ。

拳は竜平の頬を突き破り、歯茎を破壊する。大量の血と共に飛び出した数本の歯が水溜まりの上に落ちた。顔面がねじ切れんばかりに弾け飛んだ。

が、竜平はそれでも止まらなかつた。男の大きく空いた左わき腹目がけて最後の一歩を踏み込んだ。

「うああああああ！」男は慌てて飛び退こうとするが、もう遅かつた。

竜平が男の懷へ辿り着いた。それと同時に、八分目まで伸ばしたカツターナイフを左わき腹に深々と思い切り突き刺した。

カツターの刃は皮膚を裂き、皮下脂肪を突き抜けて小腸を抉り散らす。

信じられない程の激痛に男は大絶叫する。

さらに竜平はそこからカツターナイフを廻ぎ払つた。

途端、横一直線に裂かれた傷口から小腸が湯気を立てて糞便の様に垂れ流れ始めた。

「ひいっ……ひいっ……ひいっ……！」男は犬の様に喘ぎながら必死になつて流れ出る小腸を腹へ押し戻そうとした。が、無駄だ。小腸は男の想像を絶する早さで出てきていた。

死ぬ。

男の脳裏にその二文字が突如姿を現した。

そしてその二文字が男をおかしくさせた。

「ひ……ひ……ひ……ひやはひははひはひやひやひ……！」男は突如狂つたように笑い始めた。真つ暗な空を仰ぎ、雨水を全身に受け。足元では小腸が巻いて。男は笑つた。

「殺す！ 口口す！ お前だけは絶対殺す！」 そう吠えながら、男は骨がむき出しになつた血塗れの右拳を大きく横に振りかぶつた。

この時、男が被つていたフードが不意に外れた。

ズつとフードの陰になつて見えなかつた男の素顔が今、明らかになつた。

だが、竜平はその素顔を確認した間もなく、狂つた男の最期の右フックを喰らい、水浸しの暗闇の地に伏した。

そして男も右フックを完全に振り切つた後、ブツリと事切れ、自分が作つた血溜まりの中に沈んだ。

男の名は片山徹平。元プロボクシングヘビー級の選手だった。  
その中では彼は弱い方だった。

いつもパンチは大振りで、細かく打つてくる選手には手も足も出  
なかつた。

だが、一発当たれば試合の流れを一気にひっくり返す破壊力を彼  
は持っていた。

だから彼はスピードは捨て、パワーだけでの勝負に挑んでいた。  
いつも。いつも。その全てが黒星で終わつたとしても。

そして彼はある日、あまりにも勝ちたいが為に、あるモノに手を  
出してしまつた。

ドーピングだ。

その後日、試合は始まつた。

観客は余りの驚きに言葉も出なかつた。

レフエリーも我を忘れ、その様を呆然と見ていた。  
何と彼は相手を1ラウンド1分足らずでKOし、それもジャブだ  
けで勝つてしまつたのだ。

ドーピングによる肉体改造の結果、化け物染みたパワーを手にして、  
並以上のスピードも手に入れたのだった。

しかし、その試合の直後、彼のドーピング行為が摘発された。

豪雨の中の決闘から1ヶ月が過ぎた。

竜平は市民病院のベッドで横になり、点滴を受けていた。

しかし彼の体はぴくりとも動かず、窓の外の遠い虚空を見つめて  
いる眼球はすっかり黒ずんでいた。

唇からは止めどなく涎がゅっくじと溢れ出していた。

植物人間だ。

脳の損傷で自分で四肢を動かす事が出来ず、言葉も発せられなく  
なっていた。  
ただ胸だけが呼吸の一一定のリズムに合わせてゅっくじと上下して  
いる。

輝きを失った田玉が見つめている虚空は空だった。

その空は今日もじんよりと淀んでおり、コースではまた雨の予  
定だった。

彼の視界にほんの小さく、洗濯物を急いで取り込む老婆の姿が映  
り込んだが、何も感じる物は無かつた。

## あとがき

こんな糞みたいな小説を見ててくれた皆さん、誠に有り難う御座いました。無事に完結して良かつたです。

さて、このお話の舞台ですが、はつきり言って僕の近所です。現実味が増すんじゃないかなってな思いでしてみました。（増してない、だと？あつそう）

因みに学校名とかは嘘なんでヤンキーに狙われることはないだらうと思います。

この話で僕が言いたかった事…それは…

未成年はタバコ吸うな

これです。たつたこれだけです。何か文句ありますか？

あと特に書くこと無いです。

ポテチつまい。

あつそつだ。EYESHIFTというバイオ系書いてるからやつちも口号シク。

むしろやつちがメイン。

んじやまたぬづ口まで。

お前誰？

完（笑）

## 登場人物紹介（ネタばれ注意）

加藤竜平

強いクズ。男とタイマン張つて植物になる。弱点属性は火。だから死ね。

金沢修一

見かけ倒しのクズ。馬乗りしたらヨーグルトになった。名字覚えらんない。だから死ね。

田口俊

地味なクズ。赤毛のアン。だから死ね。

松崎俊

デブのクズ。瞬殺。だから死ね。

片山撤平

チート。だから死ね。

第2話のクラスのみんな

個性派揃いのメンバー。今日も元気に楽しく過ごしています。委員長はメガネの浜田さん。みんなの憧れです。3人の葬式に行きました。竜平君のお見舞いにも行つてあげました。みんな優しい子です。偉い子です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2526q/>

---

MURDER OF

2011年3月28日15時37分発行